

| <div style="display: flex; justify-content: space-between;"> 絵画史特講 講義 </div> | | 選択 | 2 単位 |
|--|--|------------|------|
| 科目類：専門 | | 開設時期：2 年前期 | |
| 担当教員 | 天貝 義教 | | |
| 履修上の注意 | | | |
| 授業概要 | 本講義では、主として、遠近法が成立したルネサンス時代の絵画（painting）から、遠近法が崩壊した二十世紀までのヨーロッパならびにアメリカ合衆国の絵画について、その歴史的変遷を中心に、美術としての意義を考察してゆく。 | | |
| 授業計画 | 第1回：イタリアルネサンス 第2回：北方ルネサンス 第3回：バロック 第4回：ロマン主義 第5回：写実主義 第6回：ロココ 第7回：新古典主義 第8回：印象主義 第9回：新印象主義 第10回：後期印象主義 第11回：象徴主義 第12回：世紀末芸術 第13回：ドイツ表現主義 第14回：20世紀美術の絵画 第15回：レポートの作成 | | |
| 評価方法 | レポートによる | | |
| 授業のねらい・学生へのメッセージ | 西洋ならびに日本の絵画についての参考図書（授業において紹介する）を十分に活用すること。また、博物館、美術館等で、実際の絵画作品に触れる機会を多くもつこと。 | | |

| | | | | |
|------------------|--|------------|----|------|
| 東洋工芸史 | | 講義 | 必修 | 2 単位 |
| 科目類：専門 | | 開設時期：1 年前期 | | |
| 担当教員 | 井上 豪 | | | |
| 履修上の注意 | 授業は一回完結を基本とする。欠席した分は補充がきかないので注意すること。 | | | |
| 授業概要 | 日本工芸美術の出発点というべき正倉院宝物をとりあげ、源流である中国・唐時代の作例と、そこから徐々に独自の展開を遂げていった日本の作例を対比する。初期に受容・吸収された外来文化とはいかなるものだったのか、それらは後に日本の中でいかに展開していったのか、幅広い視野で観察していきたい。 | | | |
| 授業計画 | <ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス 2. 古代の「色」について 3. 漆工技法のバリエーション 4. 三彩陶器に見る陶磁技術の発展 5. 仏像の作りかた（1）彫像編 6. 仏像の作りかた（2）塑像編 7. 銅鏡の科学 8. 鏡背文様の世界観 9. 咋鳥文が象徴するもの 10. 古代人の遊戯具 11. 「軾」のつかいみち 12. 屏風が作る空間 13. 座具の色々 14. 古代の服飾 15. 試験 <p>※基本的には以上の内容を予定しているが、変更もあるので了承されたい。</p> | | | |
| 評価方法 | 定期試験に平常点（出席および授業参加態度）を加味して最終評価をする。 | | | |
| 授業のねらい・学生へのメッセージ | 古代文化の源流とその消化過程について考察する。形式の進化や制作技術の発達、作品の用途、そこに込められた意図など、様々な角度から日本の工芸美術の歴史的成り立ちを概観する。 | | | |

| | | | | |
|------------------|---|------------|----|------|
| 西洋美術史 | | 講義 | 必修 | 2 単位 |
| 科目類：専門 | | 開設時期：1 年前期 | | |
| 担当教員 | 天貝 義教 | | | |
| 履修上の注意 | 『<美術>』を越えて』を教科書として使用する。 | | | |
| 授業概要 | ローマ帝国、キリスト教、ゲルマン的要素から成立するヨーロッパの美術（建築、彫刻、絵画）について、古代ギリシア美術から20世紀の近代美術の登場までの歴史の変遷と各時代の特徴的な様式についての理解を深めることを目指す。 | | | |
| 授業計画 | <p>第1回 ドルナーの美術史観について（西洋とは何か、美術史とは何か）</p> <p>第2回 原始、古代エジプト、古代メソポタミア</p> <p>第3回 エーゲ海美術（ミノア美術とミケーネ美術）</p> <p>第4回 古代ギリシア美術（幾何学様式とアルカイック様式）</p> <p>第5回 古代ギリシア美術（クラシック様式）</p> <p>第6回 古代ローマ美術（ローマを中心に）</p> <p>第7回 ビザンチン美術：地中海地域におけるキリスト教美術の発展（イスタンブールを中心に）</p> <p>第8回 ロマネスクとゴシック美術：アルプス以北におけるキリスト教美術の発展（パリを中心に）</p> <p>第9回 ルネサンス美術：遠近法の確立（フィレンツェを中心に）</p> <p>第10回 ルネサンス美術：ラファエッロとミケランジェロ（ローマを中心に）</p> <p>第11回 バロック美術：遠近法の展開（ローマを中心に）</p> <p>第12回 バロック美術：天井画の発展（ローマとウィーンを中心に）</p> <p>第13回 新古典主義とロココの美術（パリを中心に）</p> <p>第14回 19世紀の歴史主義から20世紀の近代主義へ（ウィーンを中心に）</p> <p>第15回 筆記試験</p> | | | |
| 評価方法 | 筆記試験による | | | |
| 授業のねらい・学生へのメッセージ | 西洋の美術作品については、日本国内で直接触れられるものは一部の絵画作品と彫刻作品に限られる。それ以外には、複製画像ならびに文献を通じて触れることとなるので、図書館等の図書を十分に活用することが望まれる。 | | | |

| 比較文化論 | | 講義 | 選択必修 | 2 単位 |
|------------------|--|-----------|------|------|
| 科目類：教養基礎 | | 開設時期：2年前期 | | |
| 担当教員 | 井上 豪 | | | |
| 履修上の注意 | 授業は一回完結を基本とする。欠席した分は補充がきかないので注意すること。 | | | |
| 授業概要 | シルクロードの美術を中心に、各地の美術表現から様々な文化背景を読み解いていく。モチーフ別に仏教美術の作例を取り上げ、各地域における理解の違いが図像表現に与えた変化から、異文化交流について考えていきたい。必要に応じて美術に限らず、言語・風俗・文学などのテーマも取り上げていく。 | | | |
| 授業計画 | <ol style="list-style-type: none"> 1 ガイダンス 2 ストゥーパと五重塔 3 仏像の衣 4 宝冠とターバン 5 天部像の鎧 6 執金剛神とギリシアの神々 7 王とライオン 8 邪鬼と崑崙奴 9 天使の翼と飛天の雲 10 如意宝珠と宝石の概念 11 中国の龍とインドの龍 12 風神の姿 13 神々の棲む山 14 極楽浄土のイメージ 15 試験 <p>※基本的には以上の内容を予定しているが、変更もあるので了承されたい。</p> | | | |
| 評価方法 | 定期試験に平常点（出席および授業参加態度）を加味して最終評価をする。 | | | |
| 授業のねらい・学生へのメッセージ | 図像の持つ象徴的な意味性というものに目を向ける。色や形のイメージが文化の違いによっていかに異なる意味を持つか、「自分の常識」を相対化し客観視する視点につなげたい。 | | | |

| 美学 | 講義 | 選択 | 2 単位 |
|------------------|---|------------|------|
| 科目類：分野基礎 | | 開設時期：1 年前期 | |
| 担当教員 | 天貝 義教 | | |
| 履修上の注意 | 『国際デザイン史』を教科書に使用する。 | | |
| 授業概要 | 講義の前半では主として「美術」という言葉の意味をヨーロッパとの交流史にもとづいて考察し、そのさい古代ギリシアのテクネーから20世紀のデザインまでの美術概念の変遷をあわせて考察する。講義の後半では主としてヨーロッパにおける美の概念の変遷を辿り、その意義を考察してゆく。 | | |
| 授業計画 | 第1回 はじめに：日本の美学思想 第2回 「美術」という言葉の登場：明治6年ウィーン万国博覧会 第3回 ウィーン的应用美術博物館について（1）： KunstgewerbeとBildende Kunst 第4回 ウィーン的应用美術博物館について（2）： KunstgewerbeとKunsthandwerk 第5回 ウィーン的应用美術博物館について（3）： KunsthandwerkとDesign 第6回 ウィーン的应用美術大学について 第7回 美術と応用美術について 第8回 テクネーからファイン・アートへの変遷（1） 第9回 テクネーからファイン・アートへの変遷（2） 第10回 カントの『判断力批判』における美術と美の意義 第11回 黄金比について（1） 第12回 黄金比について（2） 第13回 古代ギリシアの美についての考えについて 第14回 ロマン主義の美についての考えについて 第15回 筆記試験 | | |
| 評価方法 | 筆記試験による | | |
| 授業のねらい・学生へのメッセージ | 指定した教科書以外に、授業において紹介する参考図書を活用して、美術ならびに美の概念についての理解を深めるよう努力することを期待する。 | | |

| | | | |
|-----------------------------------|---|-------------------|-------------|
| 材料学 | 講義 | 必修 | 2 単位 |
| 科目類：専門 | | 開設時期：1 年前期 | |
| 担当教員 | 松本・平野・島屋・小牟禮・竹田・安藤・熊谷・長沢 | | |
| 履修上の注意 | 評価対象の資格取得には、原則として授業実施回数（16回）のうち、11回以上の出席を要する。 | | |
| 授業概要 | 工芸作品、製品を制作するには、造形の意図に最も適した材料（素材）の選択が必須の条件となる。そのため本講義では本学に設置されている工芸の各分野で従来から活用されてきた材料（素材）や近年の開発素材等について、その種類・特性・用途などを、オムニバス形式で解説する。 | | |
| 授業計画 | 第 1 回 鑄 金 (島 屋) 第 2 回 鑄 金 (島 屋) 第 3 回 漆 工 (熊 谷) 第 4 回 漆 工 (熊 谷) 第 5 回 陶 芸 (平 野) 第 6 回 陶 芸 (平 野) 第 7 回 木 工 (松 本) 第 8 回 木 工 (松 本) 第 9 回 彫 金 (安 藤) 第 10 回 彫 金 (安 藤) 第 11 回 染 色 (竹 田) 第 12 回 染 色 (竹 田) 第 13 回 織 (長 沢) 第 14 回 織 (長 沢) 第 15 回 ガラス (小牟禮) 第 16 回 ガラス (小牟禮) | | |
| 評価方法 | レポート課題および出席状況 | | |
| 授業のねらい・ 学生への メッセージ | 個々の学生が進もうとする分野以外の工芸材料についても理解することで、自分の扱う素材との比較によりその特性をより理解し、素材を十分に活かした作品制作に繋がることをねらいとする。 | | |

| 工芸概論 | | 講義 | 必修 | 2 単位 |
|------------------|--|----------------|----|------|
| 科目類：専門 | | 開設時期：1 年前期（集中） | | |
| 担当教員 | 樋田 豊次郎 | | | |
| 履修上の注意 | 私語は厳禁です。 | | | |
| 授業概要 | <p>楽浪漆器の研究—「アジア基層文化」探索の試み— 古代中国（前1世紀～後3世紀）で製作され、朝鮮半島の楽浪郡遺跡から発掘された「楽浪漆器」を、日本、中国、韓国の視点から取り上げ、つぎの二つの点を考察する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 楽浪漆器の総数と保存状況を調査。 2) 楽浪漆器の発見が、アジアの造形的基層という概念を生じさせたことを明らかにする。 | | | |
| 授業計画 | <p>■授業計画・方法</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 日目：考古学者の楽浪遺跡発掘 <ol style="list-style-type: none"> 1) 楽浪漆器の遺品 2) 楽浪遺跡発掘の歴史 2 日目：美術史家の楽浪漆器研究と、楽浪漆器に触発された漆器制作 <ol style="list-style-type: none"> 1) 小場恒吉の楽浪漆器調査 2) 六角紫水の楽浪漆器調査 3) 松田権六の楽浪漆技習得 4) 六角紫水の漆芸作品 3 日目：1930年代の日本美術における東亜協同体構想 <ol style="list-style-type: none"> 1) 大東亜共栄圏の思想 2) 六角紫水の「アジア基層文化」仮説 3) 近代日本工芸における東洋美術リバイバル——津田信夫を中心にして 4 日目：「東アジア共同体」構想における「アジア基層文化」の役割 <ol style="list-style-type: none"> 1) グローバル化のなかでの戦後日本文化 2) 『文明の衝突』（サミュエル・ハンチントン）と「アジア基層文化」 | | | |
| 評価方法 | <p>出席回数とレポートによって、総合的に評価します。レポート（800字程度）は授業の最終時に書いて、提出してもらいます。 ミニレポート評価の基準：「美術の政治性」にたいする理解力を判定します。</p> | | | |
| 授業のねらい・学生へのメッセージ | <p>受講前に教科書（『終わりきれない近代—八木一夫とオブジェ焼』）に目を通しておくこと。とくに、4日目の授業には不可欠です。 【教科書】樋田豊郎・稲賀繁美編『終わりきれない近代—八木一夫とオブジェ焼』、美学出版社、2008年4月</p> | | | |